ラザルヨシニテ居給フ、○略下

〔古今和歌集一春〕水のほとりに、梅の花の咲けりけるを詠める、　伊勢

年をへて花の鏡となる水はちりかゝるをや曇るといふらん

〔梅窻筆記上〕七月七日、二星ノ影ヲウツストテ、手洗ヲ設ガ、普通ノナラヒニテ、夫木集ノ歌ニモ、

聞ばやな二つのほしの物語たらひの水にうつらましかば

トアレド、知信記、天承二年七月七日、夜有乞功奠事、下官依爲行事、著束帶、參宮、供奉奠物、中略東机未申角居御鏡一面、開蓋トアリテ、鏡ヲモテ手洗ニカヘタリ、今モ手洗ヨリ鏡ヲ用ユルガシカラン、

〔夫木和歌抄十一秋〕家集池邊女郎花と云ふ事を　西行上人

池の面に影をさやかにうつしても水鏡みるをみなべしかな

〔水鏡下仁明〕世あがり才かしこかりし人の、大かゞみなどいひて書きおきたるに、おろ〳〵は見てことばいやしく、ひが事多うして見所なく、文字おちゝりて、見む人にそしりあざむかれむ事、うたがひなかるべし、紫式部が、源氏など書きて侍るさまは、たゞ人の玄わざとやは見ゆる、されどもその時には、日本紀の御つぼねなどつけて笑ひけりとこそは、やがて式部が日記には書きて侍るめれ、まして此世の人のくち、かねて推し量られて、かたはらいたく覺ゆれども、人のためとも思ひ侍らず、只若くよりかやうの事の心に玄みならひて、行のひまにも捨てがたければ、我一人見むとて書きつけぬ、大鏡卷も凡夫の玄わざなれば、佛の大圓鏡智の鏡にはよも及び侍らじ、これも若し大かゞみに思ひよそへば、そのかたち正しく見えずとも、などか水かゞみのほどは侍らざらむとてなむ、

〔增鏡一おどろの下〕いざたゞおろ〳〵見及びしものどもは、水鏡といふにや、神武天皇の御代よりいと荒らかに玄るせり、その次には大鏡、文德のいにしへより、後一條の御門まで侍りしにや、又